

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	働くものと見るもの : 論文
Author(s)	久保田, 能照
Citation	龍南, 205 : 22 - 35
Issue date	1928-02-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8987
Right	

働くものと見るもの

久保田能照

諸君の生活は、諸君自身のものであるであらうか。諸君の生活は、諸君に、ピンと参りますか。何か、かう膠をへだて、風景を、眺める氣はしませぬか。

いま私が一語を發するとします。すると、次に従ふものは何か……「しまった！」ではないでせうか。あゝわれ等に、何たる淺巡があることとせう。假りに一步をふみ出さんとします。すると、私は自分ならぬものの、爲せる、「氣まぐれ」としてより外に感じない、……何たる人格の不確實、不徹底であらうか。實にわれらの影の稀薄なる、他人よりの責任の歸負を當然と感ぜない位であります。然り、われらの生は事實われらの「もの」ではないかに思はれます。

昔、國木田獨歩は、「わが願は宇宙の眞實を實感せんことなり」と歎ひました。實にかの多感の吟客は、麻睡的なる、生活の單調に、堪え得なかつたからであらうか。省みて、われ等の生活——自己の主張、外界よりの受用、及び自己省察——に、何たる麻睡があるであらうか。

かくて、われ等は、のろくて、而も速かな日子——何となれば、「單調は長きながき瞬間であり、吾人は之を、季節に區分するを得ないから」——オスカ、ワイルト——その日子を消して二つなき日の我が生命を空しくも生きて居るのです。ほら、其處に木の間に「時間」の小鬼は、忍びやかにすべり行く。諸君には、それがピント來ませぬか。

詩人野口米次郎は歌つてゐます。

「誰か松の木に上つて、松葉を取つて呉れ、

早く澤山松葉を取つてくれ

僕は松葉でお前の肉をちくりと刺いて、血を出して見たい。

肉の苦痛位正直なものが何處にあるであらうか。

僕は、お前ともはや二十年も一緒に住んで來たが、

お前の靈の聲には決定的な、正直に觸れないやうな氣がする。

であるから、今度は、お前の肉から、自分の満足を實驗したい。

誰か松の木に上つて、早く松葉をとらんか

太い強さうな松葉を澤山とるのだ

肉から出る苦痛の聲位、正直な詩がどこにあるだらうか。

僕はお前の肉を刺いてお前の眞實な歌を聞きたい。

お前の靈の歌には絶對がない。妥協に損はれてゐる。

さあ、松葉がお前の肉を刺すから

さあ、泣け、泣け、そして、お前の肉に正直な詩を歌はせよ。」

げて詩人の言へる如く、われ等の頭は惘憊——たとへ内界に二分子、三分子の葛藤あるも、その影のうすさよ——です。かくて、われ等は意志決定の動搖を、「時」に推し流さしめ了るのであります。また、かれ等の生活は空假です。内的必然なくして動くからであります。

さて何が、われ等の生活を、われ等と遊離せしめたか。私は考へるに、それは「知識」——常識と言ふもよろしい——と、そして「對他的關係」の二つであります。

思ふに、知識の澎湃たる、近日の如きは、前古無比であります。之れも、慧知にはあらずして、常識であるのであります。其處で問題が起る。左しようか、右しようか、吾今、十字街頭に、立つと言ふ奴です。あまり、自慢にもならぬ話——むしろ、排斥さるべきだが、事實は人々すべてがかゝる混沌にあえいでゐるのです。其過程にこそ、意義はあれ、ですか。その語は、到達の曉に言つて下さい。世迷言か諦めとしか響かないでありますから。人々は金輪際、泥沼に落ちて行きつゝあるんですから。

次に「對他的關係」とは何であるか。われらは人間である。かるが故に、絶對に他人の存在から自由である事は出来ない。だが、人々の志操——いやなら、人格の確實性、意志の恒久性でもいゝ——の動搖せる、今日の如きは恐らくあるまいと思はるゝのであります。我らは、「あななかま」と白眼視すべき俗衆の喝采に何たる、自己満足を得るであります。我らは、群集の前に立つとき、自己意識を忘ればしないでしょうか。敢て「今日の如きはない」と直言せるは、社會組織の複雑化に、之が起因する所多き故であります。

かくの如き、動搖と喪失との由て來る所的那邊にあるかを究明し、奈何にせば、本然の自己の生活を爲し、群集中にても、自己を保持するを得るかを、先哲老子によつて、見ようとするものであります。即ち、問題は、

一、生活に於ける生活者の分子と、傍觀者の分子、慧知と知識

二、あせる心と、あるがまゝの我

三、老子の虚靜の道

四、我らの理想

の四つであります。

二

現代は人格分裂の時代であります。

我らは心中に二分子三分子もの、葛藤を見ます。科學はすべての偶像を破壊し終つて、我らに「信する心」が奪はれたかに見えます。まことに、始原の民は生活の化身でした。「井を掘つて飲む。耕して食ふ。暮れたら寝る。帝の力何ぞ我にあらん」と腹鼓をうつてゐたのです。其の生活の中心は、自然に始まり自然に終るにあつた時代です。

人間には次に、理窟をこねる時代が参ります。だが、この時代とて、「丈夫は意氣に感ず」とか、何とか言つて、寸鐵的な言葉に、參つてしまつてそれらとつゝ込まない。「仁」だつて「義」だつて、その「器」に酔つてしまつた時代です。現代も、膽力主義感、激主義が一部學生に奉ぜられて居ます。

最後に近代科學の時代です。科學の務は全てを分析します。裏の裏まで、見透すのであります。こゝに「働くもの」——即ち生活者——と「見るもの」——即ち傍觀者が問題に成つて來るのです。

例を引きます。こゝに、美人があるとします。私なら、私がこの竊窺たる、美人に、誘引を感じるとします。其時「美は皮一重にこそ」と諸君が水をさゝれたら、如何でせう……私の中なる、生活者は最早酔はないであります。全て、科學は美的受用の分野を犯しました。——少くともしか見えます。かゝる傍觀する眼があるとき、生活者の赤兒は、まぶしさと、恐ろしさとにふるへにふるへて、成長も、進歩もひどく、弱らされるのであります。

これは已むを得ない……だがも一つの、「見る分子」が我らに發見されます。それは、社交智であります。我らは幼き時詩人だつた：所がいま、學者に墮し終つたのです。見給へ昔日は他人との談話に酔ひ、酔ひて、自己を忘失する、天使——今は見る、刑事の眼を以て、互に、相手をぬすみ見する末世の姿。私の友達の一人はかく主張する……「他人と會話するときは、その人を持ち上げるに如くはない。屹度本音をはくから。その代り相手が、上つてしまつて、上から出るのが、少し癪ではあるが。そして、この人とは思つたら肝膽相照すんだね」：友達相互間に於ては、理智は禁物であることを、彼は知りません。假令好意ある心やりさへ友より上へ出られた時余り愉快な氣は致しますまい。まして——。これらの俗輩は傍觀者の妖雲の凝固沈澱して行くのに、氣付かず、自ら、智者を以て許し、得々として居るのです。その相手の「子供らしさ」の尊さよ……澆季の世を憐んでも居ま

せうか。

われ等には、其他に、ある情、ある意の起るとき、それが内部構造を見透す分子があります。げに、人の視線なき曠野で心は、何たる、自由を、持ち：それと反對に、四衢八街の雜鬧で、何たる、自己意識の空洞があるかを思つて見給へ、：そのまゝであつたら問題はない。だが傍觀の冷かな眼が次に來るのです。

アンデルセンの即興詩人の最初の部にかうあります：：アントニオー即興詩人の耶ーは生れつき利口かつた。お母さんは、人さへ見れば、その兒を、その面前で讀めちぎるのを常とした。爲めに、アントニオは、自己がしかくあるのだと、思ひ込む。彼の聲は、美しく、お説教が上手であつた。お母さん、及び知りべの人皆「この子は聲がいゝ」と稱へる。すると、アントニオはその次のお説教よりは、説教に熱中し得ないで、その美聲への誇りと、それに對する、他人の關心―賞讃にのみ、氣をとられる様になつてしまつた。純真なアントニオは、その心の不純の源をあやしみ、且恐れ「聖アリア様、願はくは私を純一ならしめ給へ。全てを忘却せしめ給へ。」と泣きじやくる……と言ふ話であります。

この傍觀者的分子は、全ての人に共通の病であります。人々が、かく、他人のなすり付けたる假面を被つて亂舞する――その自己フラッターの極に於て、冷やかに、傍觀する分子を包むとは……そして、醒めては酔ひ――いな、屢生活者も傍觀者も影うすれ行いて、醒めながら沈み行くとは。……そして酒精も、官能も、之を麻睡せしめ得ないとは。人間はタンタルスの苦惱を苦しんでゐます。一步步まんとしては、其の脚に危み一語發せんとしては、その聲に恐れる様子です。

そは何に、起因するか。生活、基礎たる規範をもたないからです。(私は、規範に於て必ずしも、その永久性を主張しない)。近代人は、慧知を忘れて、知識について居ます。其の證據が×××講の多様でありませぬか。言ふ迄もなく、それは、近代人の血あり肉ある思想よりも、「話せる」人間になる爲めの、お「教養」の爲のゴシップ的知識を欲してゐることを示すものであります。釋尊は天が幾つもあると信じて居た。大池は平たいことを疑はなかつた。今は子供でも、それ位は知つてると、申します。だが、思想の評価は、その實感の度によることを忘れてはなりません。言ひ換へれば、その思想がどの程度までの切實感を伴つ

てその人に迫つたかが問題です。當今の常識主義者―何でも分つて居られる高心冷頭の人の知識は、思想は、印象は「見れども見えざる」眼で感じたものです。

かくて人は、知識の空しき小鬼どもの、角力とるのを經驗する……それが、近代人の心の葛藤と言ふものです。働く引力も弱ければ、反撥する引力も弱い。興味と不定とに人はあえぎにあえぐのです。「我に銘刀あれ。我心のからみからめる、腹わたを、すつぱり切るから。」と叫びたい位です。「決定と絶對はわれ等に見出せない」のでせうか。

自然の兒は、胸奥深き處に監視の太陽の下に動きがとれずに居るのです。故あるかな、知識階級の不純と臆病と無力の説かるるや。徳富蘆花は國木田獨歩に與へたる尺牘の中に「僕思ふに、頭腦ばかり使ふと、惡魔となり、手足ばかり使ふと獸になる。そこで少し讀書もやる。勞動もやる。」と言つて居り、獨歩また、ある小説の中に、「人間は、學問あるものは、他人より多く膽力がなければ『スハ』の用には立ち兼ねる。」と説いて居るのは、個中の消息を語りはせぬでせうか。

是に由て、之を視るに「見る」とは終に生活の破壊より以上何物でもないことを了會しました。

だが、之のみではありませぬ。生活をして、眞實のものたらしめず、上の様な痴態を演ぜしめる要因は――それは「外界への誘引」――「内生活と外生活との混同」即ちこれであります。

三

人間には要求する心があります。他人に主張する傾向があります。下は俗輩より上は達人に至るまで。――

俗輩は眼に見える、手にとつて見られる、有形的報酬を主張するものです。だが俗輩のみではありません。『威武も屈する能はず。金錢も淫する能はず。だが我に名を與ふと誘ふ者あらば、我動かざるを保し難い。』と、熊本の佐々先生も、歎ぜられてゐます。名―これ要求する心です。

西郷南洲も矢を人格化して、之をその要求する心の對稱とし、頼山陽また、今人に望みを絶ち、而も「知己を千載に待たざる

にあらざる」主張する心をもつて居たのであります。

この點を、ラスキンはいみじくも道破しました。

「今日に於ては教育それ自体が、直ちに、人生に於ける榮達である様な教育であることを要する。

「蓋し、榮達とは、他人から仰がれるやうな地位を得ることを意味する。吾人は解する。榮達とは、金を拵へることでない、金を拵へたと言ふことが世間に知られることである。大なる目的を達したことでない。之を達した様に見られることである。

「水夫が船長になり度いと思ふのは、自己が、船中の如何なる人よりも、船のことに熟達してゐると言ふ自覺からではない。彼は唯船長と呼ばれたさに船長になりたいのである。」

（引用長きに恒つて恐縮であるが私は一言「名聲慾てふ人間發奮の動機」をラスキンと共に「攻撃もしなければ辯護もしない」ことを附言する。）

人間は本來、遠心的傾向をもつ……だから或程度の虛榮心の満足は必須であります。だが心すべし。われ等は、大なる仕事を成すのでなく、唯「大なる仕事を成したと見られる」ことを、希求するに至るのです。まことに恐るべきは、外生活の内生活への混入であります。

人間の生活は、この時、完全に他人に支配せられてゐます。見給へ。彼らは、他人の捺せる烙印を眉間につけて亂舞します。

「眞實」は心の遠心的傾向のために、空洞その物と成り、ひそかに、悲鳴をあげる。だが、舞踏者は、そのとき、あらぬ論理——「他人にかう見える」本位の論理を以て自己納得を試みるのです。それでも、「眞實」は叫びつゞけます。だがその時は、うるさい内生活の「眞實」を心氣轉換によつて、逃避します。これが近代デカダンスです。だが如何に遠心的な彼らでも「眞實」の聲はいつも、いつもさゝやきます。こゝにタンタルスの苦しみがある譯です。

かくて、彼らには、内的必然による、自己の生はなくて、影うすき存在に於ける、影うすき葛藤より生れたる、氣まぐれがあるのみです。眞劍さの缺けた、彼らは、軽い試みの氣分で生きてゐるのですから。

以上の、外界に向つて、放射する心と根源を同じうする「あせる心」が内生に於て見られます。啄木はその心を歌つて、

火にあぶりしが、

咲かざりしかな。

と嘆じて居ます。内生活に於ける、人間の焦燥——早く、この思想が成熟すればいいに、と、あせりあせつて、手でつゝき人に見せる、あの心を象徴して居ると見ます。

自然は終に人工の一指だに觸るゝを許しませぬ。孟子に「宋人苗の成長晩きをなげき、行きて、その芽を引く。翌日行きしに皆枯れたり。」とあります。然し、我らの監視する心は、自然に、成長する芽を引き伸すことを止めませぬ。思想の芽などどうであります。がも一つ。

悲しみの

つよく至らぬさびしさよ

吾子の身体冷えて行けども

と言ふのがあります。こんな所に引用して冒瀆かも知れません。がともかく、私は、この歌によつて内生の傍觀者に「あせる心」要求する心のあることを示したいのです。悲しみが強く來ぬ、どうしたものだらう……と疑ふ所に、親心の一面あつて、こゝろを叱咤する所を歌つてゐることを示したのであります。

然り！この傍觀者の分子——屢々慣習であり、他人からの假面である——はかゝる要求をまでなすものであります。

眞の自己の埋没せる人は、——或は影うすき人は終にその説得に征服せられるであります。混沌たる頭腦の中に尤もらしき論理もて迫る、この種の要求する心あるとき、或は「眞實」に敗れ或は情性の爲め「時」に任せてしまふこともありませう。

このよき意味に於ても、惡き意味に於ても、What I am' Wishのために、その監視内に於ては成長進歩しないことを御注意願

ひたす。I wishの努力を無駄であるとは言はない。成長の方向はそれによつて定まるのですから。たゞI wishの心の睡れるときWhat I amは成長進歩する事であります。何たる皮肉でせう：知識は有難く又調法なものであり乍ら、そして、成長進歩等の言葉さへもが「知ること」から始つて居るのに、What I amは依然、のろのろと、自然の成長を續けるとは。

感情の例を引いて見ます。芭蕉の詩境を窺つては、人は、自然を、芭蕉の眼で、見ようします。灰色さへ見れば、これこそ「寂」だとしてしまふ様です。然も之は全く本質を越えた、要求が感情をしかく、見せて居るに過ぎませぬ。

これ丈の省察と検討とによつて、現實の説明を終り、次に老子主義の絶對境を説かねばなりません。

四

暫く、私の「日記不用論」の一節を引用して戴きたい。それが老子主義を直接叙法に於て、示すでせうから。

『「文字は思想の價値を半減する。どんな尊い思想でも、文字に表せば、その十分の一でも表して居ることは、極めて稀だ。」と、千葉龜雄氏は言つて居る。だが、氏も、文字の不完全さの表現に半分成功して居るに過ぎぬ。俺は他の一面を知る。言語、文字またすべて表現には思想の生命力の消耗が伴ふと言ふこと、これだ。そこに心的精力の適度の放出がある。——だからこそ筆とる時、人は快感を覺えるのだ。大町桂月は、「悲しい時、腹だくしい時、一文を草すれば、吾人の心境廓然無想。文章の功また偉なる哉。」と言つて居るが、——恐らく有意的になされたのであらうが——「能文の士」の無知による自己生活からの逃避を俺は憐まれる。

試みに、見てもみ給へ。俺が毎日の思想生活の経過を日記になぐり書く時、何たる空洞の感が、その後に従ふであらう。そして、次の瞬間、思想は最早切實感を以て俺に迫らないのだ。親たちの無知による快感追求のために可惜、「思想」の胎兒は、流産してしまつたのだから。

俺は今や日記に毎日、思想生活を記すことは、學徒の爲さざる所たるを知つた。やつぱり俺はむらむらとした夏の高層雲の如

き思想のむらがり、其の成熟の日まで壓迫されねばならない。部分々々を、瞬間々々に放出して行くことは、自己に對して冒瀆である。すなはち、思想をはらめる俺―父であり母である―は、暫くの節制を守らねばならない。

俺は終に待たねばならない。材料の取入を豊富にし、一方放出を節約しつゝ靜かに待たねばならない。ラスキンの所謂「浮出づる思想感情」を、その時々々々、放出するとき、其故に、求心的傾向の欠除を生じ、内生は他人の關心を要求する心―遠心的傾向のために、「すつからかん」と成るであらうから。勿論人間には對外的に求める心のあるのを、俺は知つて居る。だが、その「あせる心」のために「あるがまゝの心」を淫せられては、馬鹿らしくはなからうか。即ち俺は對内的に沈潜して行きたい。』

今度は老子に、耳傾けませう。

治人事天、莫如^{ヲシム}知^ル。

治人事天第五十九、

「自己」を愛惜して猥りに放出しない態度です。かくの如く沈黙の森にあればこそ「眞實」の生は營まれませう。

吾言甚易^レ知、甚易行。天下莫能知、莫能行。言有^レ宗。事有^レ君。夫惟無^レ知、是以不我知。知^レ我者、希則我貴矣、是以聖人被^レ褐懷^レ玉。

吾言甚易知章第七十

宗とか君とかは「無爲」を指します。「我を知る者、希なるががたぢけなし」の被褐懷玉の老子は、かの主張する所火の如かりし和民と比べて何たる對比でありませう。

老子の主義は考へるに、忘却主義であります。私は獨逸詩人ヘルデルリンの歌を聞く……

「然り！唯だ忘れしめよ。人間の在ることを――。悩ましく苦しめる魂よ。そして、汝^{イナ}のもと來りし所、ゆるぎなき、靜かなる美しき自然の胸に歸れよ！」

知^レ不^レ知上。不^レ知知病。夫惟病^レ病、是以不^レ病、聖人不病。以其病^レ病、是以不^レ病

知不知章第七十一

知つて居て其の知れりと言ふことに關心を持たず、惟虛心である。俗人は知れりと言ふことに煩はされる。即ち是病である。私は、老子の補註をこゝに掲げる……「知者は物を逐ふ故に偽多し。不知者は本に反る故に、眞人に近し。能く知つて知らざるを

眞に近しとなす。知の偽多き事を知るは上なり」即ち聖人はその墜り易き執はれたる境地を警戒すると言ふのであります。

私にはヘルデルリンのも一つの句が湧く……

「自己が如何にあるかを知らず、又自己が何を知れるかを知らぬ小女よ。汝は天上のものである」

即ち老子は全然無意識なる生活者を理想として居るのであります。知のことを私は述べました時、知ることは、本然の自己の自由を奪ふことを説きました。

天下、皆知美之爲美。斯惡已。

天地皆知章第二

唯感ずればいい。言葉にするも、概念に組むも無用じやと説くのであります。この點直觀主義であります。然り、無名、天地之始であつたのです。風信機は風のまにまに動かねばなりません。鑄づいて言ふこと聞かぬ風信機を絶對的標準とする人が詩人學者ともに多い世の中です。

以上、私は私の眼を透して、老子を見たのでありますが、知に淫せられないこと、對他關係に於て、節約を重んずることを知り得ます。それは理想ぢや、と言はれますか。

一言します。由來、樛牛が灌口入道を抑せる一文に「覺れりとは、泥沼に落ち込みし身を知るのみにて、之を脱するの謂ならず。げにや、煩惱の灌口は、戀の苦酒、殘滓も残さず飲み干して、愛慾の沼奥深く沈淪しつゝありしなり。」まことに、知るのがある境に没入しての後であります。要求——解脱せんと心の心起るはもつと、もつと後のことです。老子は身「虚無身然」の境にあつて、よく「老子」八十一章を物したとは考へられませぬ。理想は——思想は終に、現狀打破のうめきであるのが常ですから。

元に復ります。雖かしいではありませんか。老子を忘れたとき、虚無自然になれるのです、面白いではありませんか。概念、言語排斥の老子が「虚靜無爲」てふ概念言語を造つたのです。其の境地に達する道がない所が玄妙不可思議です。「今こそ老子の絶對境ぢや」と言ふさとの來てならない教です。その時、已に概念の世界であり執着の境地であるのですから。そんな教は無放の教で、全然作らなかつたらよかつたと言はれますか。

我らはまだ、概念の世界、規範の世界にあります。老子を、その點まで引き下げて、考へる……それでいいでせう。我らに常識主義を排撃して呉れ、對他人關係の七面倒くさゝから逃れた、眞風光の自由を、——よし詩的な一時の夢であつても——示して呉れた點が有難いではありませんか。

かゝる消極的の自己籠城が現實生活に適用されるか。そのお問に身を以て答へる人が三人あります。聖フランシス。孔子。ソクラテス。

五

私は聖フランシスについてさう知るものでない。たゞ阿部次郎著「三太郎の日記」中の節節を記憶するに過ぎないのです。曰く、

「故郷に歸れ。其處に汝のなすべき事がある」

「彼は、常に自分自身と傍に立つものとの間に何物かを置いて、公衆の中に立ち乍らも、隠れて祈るのであつた」

「彼は自分の胸を殿堂とした。彼は自己について、無意識になつて居た」

流石キリストの弟子です。「狭き門より入れ、滅びにいたる門は廣く、之より入るもの多し。生命にいたる間は狭く、その路は細く、之を見出すもの少し」の教を信奉して、此の自己壓迫や自己フラッター——これらは、外界への誘引に由る——もなく自己について無意識であつたのであるから、之こそ、老子以上の老子である様です。

次に孔夫子ですが、あの實際的實切的などの形容を戴く孔夫子は實は、老子の境を極めて居ます。老子の隱遁主義——憶測——に反して、極めて、外的活動に努力した孔子——そして、「自己」を失はず、着任、三ヶ月にして、斬るべきに斬り罰すべきに罰すると言ふ果斷の孔子——「心の欲する所に従つて則を越えぬ」孔子は老子より少しえらさうです。かやうな言葉を出した所から見ると孔夫子は傍觀者的分子も有つて居られたらしい……其處がわれ等俗人に近く親しく感ぜられます。

最後にソクラテスです。この人は民衆政治の本元ギリシャの生であることを、銘記する要があります。何となれば、老子にした所で孔子にした所で、釋尊にした所で思案的、沈黙の傾向——即ち東洋主義の人々であります。だがこのソクラテスは、辯論の自由の理想的に完きギリシャに人と爲つた所に、前の人々と區別せられねばなりません。開放的論議がその三度の飯であつたのです。

ソクラテスは、其の間不自然なる分子の擡頭を見なかつたのです。彼は元來、自己の不知を強くつよく感じて知者と爲されて居る者を訪問しては、問答をなすのですが、我ら俗人の墜り易き、他を卑しくして自己優越を感じるが如きことは一度もなかつたと言ひます。

又彼は身体と、精神との虚靜を保つて居て、死が彼に迫らうとも、内なる聲——否定の形である——を聞いたと傳へられて居ます。

獄中に、訪れ來つて、亡命を勧告する友人のクリトンに

「併し愛するクリトンよ、なぜ我々は、そんなに、多數者の評判を氣にしなければならぬだらう。もつと顧慮に値する識者達は實際あつた通りのことがあつたのだと信するだらうじやないか」

「理性的思考の結果最善と思はれるやうな主義以外には内心のどんな衝動にも従はない氣であるのだから」

「たゞ得心が行かずに、それをするのが困るだけだ」

之より先法廷に於ける、辯明は古今に亘つて、無双の大演説であります。言葉でなく、その論理と、その真情との點に於て——

彼は言ふ、

「私は或罰を自分が當然受くべきだと考へることに慣れてゐない」

何と言ふ自信の強さであるよ……われらは、李下に冠を正すのさへ、平氣で爲し能はぬのでなからうか。われらは市場に「糸くず」を拾ふてゐるのを他人に發見せられても「罰に値する」と言つた感起るほど弱いのです。

「蓋し、諸君は諸君の生活に、明白なる説明を與へる責務をのがれる事が出来るつもりで、この事を行つた」蓋し、彼の生涯は自己省察のそれであつたのです。

わがソクラテスは衆と共にあつて淫せられず、かへつて、真理の研鑽に、これつとめたのです。實に彼こそは現實に於ける老子であるのであります。

われ等の理想はソクラテスであります。又、しかくあるべきであります。實に社會とは、傍觀し得られるものでなく——丁度小説家島崎藤村も人生の從軍記者で終り得ない様に——一瞬々々その一分子としての生活でなければなりません。この時じつと自己を守らねばなりませんから。

だが、ソクラテスへの道程に於て、幾多の自己喪失幾多の假面舞踏があるであらう。だが眞實はさゝやきます。その時、その聲を空過せしめてはなりません。群集の中にて空洞さを覺えたら、ツアラトートラの然りし如く靜謐と思案の洞穴へ歸らねばなりません。

(舊一月一日朝)